「回想」（抜粋）　尾角隆良

昭和22年の川沿小学校入学時の思い出

『川沿小学校開校90周年記念誌』掲載

私が小学校に入学した昭和22年は終戦後まもない頃で、疎開で残っている家族また新天地を求めて入植してくる家族も多い時代の中での入学式でした。

今思うに当時の雪は大変多く、入学式だというのに今とは違って除雪はされてなく、馬そり道しかなく、雪が溶けると馬の糞だらけの道路で、はく靴も親が作ってくれたわら靴とか動物の皮で作ってくれた靴をはいて通った記憶が残ります。服もランドセルも店にはなく、母親が自分たちの着物を壊して作ってくれた物を身につけ、通学したものでした。

学校に行くと教科書だけはお金を払って買うことができましたが、他にノート、クレヨン、鉛筆、学生服、長靴などは配給の時代で、くじ引きで当ててやっと買うことができる頃でもあった時代です。

そうしてまた冬になると、学校の中を歩くのに長靴のまま土足で歩いた時代、吹雪の後など登校すると学校の中はいたるところ雪だらけ、大掃除が大変だった。

他に冬の毎日の掃除は教室に雪をまき、箒で掃き掃除をしたものだった。

当時、暖房も石炭を使用するタコストーブであったので、周りの人たちは暖かいが離れた人たちは寒くて、1時間目は授業にならぬ時もあった。

その上児童も多く、中学生も数えると300人以上の時代で教室も足りず、1教室に複式教育みたいに2学級の児童と2人の先生が入り、教えなければならない時代でもあった。

また吹雪になると集団下校は今と違い、電話もないので連絡が付かず迎えに来てくれる家族もないので、上級生を先頭に馬の足跡を頼りに転びながら歩いて帰ったものでした。

そして秋になると冬の焚き付けにと防風林まで約2キロある道を歩き、木の枝を拾い、小さな背中に背負って学校まで運んだ思い出。

一方、今では給食があるけれど当時は母親の手作り弁当、麦と米の混ぜたものに梅干しが2～3個入っている程度、時にはだんごの弁当もあった。その内、時代は変わり、物資の不自由さも少しずつ緩和されていった。

昭和25年には富丘小中学校もでき、一部は富丘校に移ったため、だいぶ人数も減ってきた。その内、川沿中学校も増築され、やっと伸び伸びと授業が受けられる時代、それでも学年に30人から40人の児童が在籍し、教育は明るくにぎやかだった。（略）

＊昭和22年4月1日　学制改革により常呂村立川沿小学校と改称
　　常呂村立川沿中学校併置認可
　　4月1日　常呂村立川沿中学校開校
＊昭和24年9月　川沿中学校校舎増築（普通教室2　廊下55坪）
＊昭和25年4月1日　富丘小中学校開校（川沿中学校から19人移籍）
＊昭和25年10月　川沿中学校校舎増築（普通教室2　家庭科教室1　工作技術教室1
　　計331㎡　玄関改築）